

前世処刑された令嬢は

過保護な王太子に甘やかされ中

第一章

（ああ、またこの夢……）

シンシアはその光景を高い位置から見下ろしている。
まるで物語的一幕を眺めるように。

場所はカビ臭くて薄暗い平民用の牢屋の中。女性が一人、虚ろな表情で座り込んでいる。

目を奪うような鮮やかな赤い髪を結い上げ豪華なドレスで美しく装っている姿なのは、夜会会場からそのまま連行されたからだ。

不似合いな場所にいる、その憐れな姿に胸がツキンと痛む。

女性のいる鉄格子の内側には金髪に金色の瞳の美しい男性が立っている。男性は苛立たしげに顔を歪め女性を睨んでいる。その身なりや佇まいはあきらかに高貴な人だ。

女性はベイトソン公爵家の娘マリオン、男性はマリオンの婚約者でこの国の王太子クリフトンだ。

——シンシアはこの後に何が起こるかを知っている。だってマリオンはシンシアの前世だ。

彼女はこれから婚約者に毒を渡される。それを抵抗することなく飲み干してしまうのだ。俯瞰^{ふかん}して見ると、なんて可哀想な女なのかと思う。

クリフトンの婚約者としてすごしたのはたった一年。

それでも彼に相応しい婚約者になるために精一杯努力した。

シンシアの——マリオンの上に愛情は芽生えなかったが、彼を尊敬していた。だからいつか愛情以外の感情……そう、たとえば友情や国を支える同士のような思いが生まれればいいと思っていた。でもそうはならなかった。その証拠にマリオンは犯してもいない罪で責められている。きちんとした調査もなく法に則^{のっと}るわけでもなく、彼の独断による断罪で牢にいる。

クリフトンは口を開くと強い口調で言葉を放った。

「マリオン、不貞^{ふてい}はないと本当に断言できるのか？」

「私は不貞^{ふてい}などしておりません」

「マリオンが騎士と抱き合っていた姿を見たという証人がいる。それは事実ではないと？」

「誤解です。抱き合っていたのではなく、具合が悪く歩けなくなったところを騎士様に助けていたのです」

「……………」

クリフトンの顔には疑心が浮かんたままだ。

信じようとしぬ相手には必死に弁明するのは空しい。段々と諦めが心に滲んでくる。

それでも認めるわけにはいかないと声を絞り出しマリオンは無実を訴える。

マリオンのエメラルドグリーンの瞳は堪^{こた}えることのできない涙で揺らめいていた。

マリオンは夜会をこっそり抜け出して男性と逢^{あひ}引きしていたと噂をされていた。

そんな事実はないのにとうとう信じてもらえなかった。

「マリオン。私をどう思っている？」

クリフトンは低い声で問いかける。

マリオンに向けられる視線は何かを見極めようとしているように感じた。

この質問は今までも何度かされた。マリオンはいつもと同じ答えを返す。

「殿下を尊敬しています」

これは本心だ。

王太子として驕^{おご}ることなく真面目に公務をこなし、毅然^{きげん}と振る舞う姿は次期国王に相応しい。だがマリオンの返事に納得できないのか、クリフトンは不満げに顔を曇らせ、はっと息を吐き落胆を露わにした。

それならマリオンは何を言えばよかったの？

クリフトンはどんな言葉を求めていたの？

「そうか」

彼はスッと表情を消すと自らの手をマリオンに向けて差し出した。

彼の掌には黄色い小瓶が握られている。

「殿下……」

マリオンは呆然と呟いた。

彼女は瓶の中身を知っている。王太子妃教育で教えられた王家の秘毒^{ひどく}。黄色い小瓶は王族が自死をするために使う特別な物。苦しまずに眠りながら死ぬる。

黒い小瓶でなかったことに感謝するべきなのか。黒い小瓶は王族を侮辱^{おとしやう}した者に与えられる物で、長い時間苦しんで死んでいくという、報復を目的とした場合や重罰^{じゅうばつ}に用いられる毒だ。

疲れたわ——もう、いいわよね？

心の中でそう自分を許してあげることにした。

一度ゆっくりと目を閉じ、そして再び目を開いたときにはマリオンはすべてを諦めた。

そう、生きることを諦めてしまった。

「マリオン。これを飲め」

感情のない声で告げられたそれは実質的な死刑宣告——マリオンは顔を上げてもう一度クリフトンを見た。彼は冷ややかな眼差しを向けるだけだった。

マリオンは心の中で自嘲^{じちやう}した。

彼の意志は固く同情や迷いは読み取れない。あるのは疑惑だけ。

これは死ななければならないほどの重い罪なの？

私はそれほどまでにクリフトンと信頼関係を築けていなかった？

たとえ罪が晴れても自分はどうせ幸せにならない。それなら人生の幕を閉じよう。

決意が固まると手を伸ばし黄色い小瓶を受け取る。蓋を捻^{ひね}って外し中の液体を躊躇^{ちゅう}うことなく一気に煽^{あお}った。甘くとりとした味が口内に広がり喉を通していく。

（毒^{どく}って苦くて不味い物だと思^{おも}っていたけれど、これは甘い^{あまい}のね）

「ふふふ」

毒の味の感想を思うことが可笑しくて自分を嗤^{わら}った。

薬は即効性だ。すぐに体の力が抜けふらりと仰向けに倒れる。教えられていた通り苦しくない。

このまま死んでしまうなんて信じられないほどに。

マリオンの心は恐怖を感じず不思議なほど凜^{れい}いでいた。

（とても……眠い……）

目を閉じるとある人の顔が瞼^{まぶた}の裏に浮かんた。その瞬間、無意識に口元が綻^{はな}ふ。

マリオンは穏やかな気持ちである人の幸せを祈った。マリオンはそのまま静かに息絶えた。

——シンシアは思う。マリオンのあつけない人生、その終幕はあまりに残酷だ。

マリオンは自分の気持ちを押し殺して王命でクリフトンとの婚約を受け入れた。

そして苦しい妃教育をこなしてきたのにひとつも報われなかった。

辛いことを我慢した結末がこれならば、逃げてしまえばよかったのに。

クリフトンは表情を変えず言葉もなく、ただ冷たくなっていくマリオンを眺めている。

駆け寄ることも介抱することもない。動揺どうようもしなければ悲しそうでもない。かといって嬉しそうでもない。

クリフトンにとってマリオンの存在とは何だったのか。彼はこのとき何を考えていたのだろう。

——シンシアはそれをただ……じっと眺めていた。

シンシアが目を開けると自室のベッドの上だった。窓からはカーテンの隙間を縫ぬって朝日が差し込んでいる。体を起こしベッドボードにもたれかかった。気分はともかく爽やかな朝だ。

「ふう。何度見ても私の前世の最後ひさんって悲惨ひさんね」

夢で見たのはもう、何回目だろう？

一年くらい前から突然シンシアは前世の夢を見るようになった。最初は混乱したが今では慣れっこになってしまった。不定期に見るこの夢はいつも鮮明で、まるでたつた今日撃したかのように生々しく感じる。それなのにシンシアは驚くほど冷静で他人ごとだった。

普通、これだけ悲惨ひさんな前世を思い出したらうなされて汗だくで起きて動揺どうようする。

そうならなかったのは第三者として眺めていることで感情移入しなかったのと、何度も見たことにより耐性ができたからだと思う。

そもそもマリオンとシンシアは完全に別人格として存在している。

あれは終わったことで、思い出したからといって悩んでもどうにもならない。

だって前世には戻れないし、戻りたいとも思わない。

シンシアにとつて前世の記憶よりも、昨日寝る前に読んだ小説の主人公の気持ちのほうがよほど共感できるものだし、引きずっている。

動物と少女が主人公の物語は感動の大作で、昨夜は号泣してしまった。

正直なところなぜ何度も前世の夢を見るのかわからない。

もしかして神様からの何かのメッセージだったりして？ どんな意味があるのかしら？
どうでもいいわ。それよりも今大切なことは——

「すっごくお腹空いた」

手でお腹をさすりながら呑気んきな声を出す。

まずは朝食を！

シンシアは侍女を呼び着替えながら前世を回想した。

◇

シンシアの前世であるマリオンはクラム王国王太子クリフTONの婚約者で、ベイトソン公爵家の娘だった。ベイトソン公爵家の親子関係は冷え切っていた。両親は政略結婚だったせいかマリオンにまったく関心がない。

いや、政治の駒^{こま}としては利用価値があると思っていたのかもしれない。娘が王太子妃になれば公爵家の権勢が華やぐ。

でもそれだけで、親から娘に与えられる類^{たぐい}の愛情を感じたことは一度もない。ただひたすらに、公爵家を継ぐ娘として恥ずかしくないように教育されてきた。

そう、マリオンはもともと公爵家を継ぐはずだったのに突然変更になった。

——王命で王太子クリフトンの婚約者に決まってしまったのだ。

もちろん王命なので断ることはできない。その日から公爵家を継ぐための教育より遥かに厳しい王太子妃教育を受け、クリフトンに相応しくあるための努力をしてきた。

内気なマリオンは心の内を隠して、自己主張をせず従順だった。

クリフトンは頭も良く見目も華やかで優しく、お手本のような王子様だった。公務もそつなくこなしていた。足を引つ張るわけにはいかないというプレッシャーはいつもあったと思う。

政略で決まった婚約ゆえに二人の間には恋という甘い感情は芽生えなかったが、マリオンは彼を尊敬していた。

自分なりに寄り添ったつもりだ。一緒にすごす中で信頼関係を築けていると思っていた。それなのに彼は不貞^{ふてい}の噂^{うわさ}を鵜呑^{うの}みにして、マリオンをかけらも信じず切り捨てた。

——どうしてこんなことになってしまったのか。

ベイトソン公爵家の正当な血筋を持つ子供はマリオンだけ。

父を嫌う母が二人目を産むことを強く拒否したからだ。

二人とも愛人との間にそれぞれ子供がいて、父は愛人との間にできた子に家を継がせたいと思っているが当然母が許さない。お互いの考えを主張し何年も揉^もめていたが、マリオンが十五歳になるという加減跡継ぎを決めなくてはならないと父が折れた。

そして、親戚筋からマリオンの婚約者を選び、婿入り^{むいり}してもらうことが決まった。

婚約者となる人が公爵家の屋敷に來たのは、マリオンが社交界デビューする一年前のこと。

婚約者となる人——彼はエッジ伯爵家の四男で名をコンラッドという。

マリオンより五歳年上で、長身で逞^{たくま}しい体を持ち威圧感のある男性だった。

聞けば騎士として働いていたが今回の縁組^{えんぐみ}をきっかけに騎士を辞めることになったという。騎士だったことを知り、その体格の良さに納得した。

でも公爵家の都合で彼の将来を変えてしまうことになり申し訳なく思った。領地経営などを一緒に学ぶ必要があるため、騎士のままではいられなかったのだ。

ベイトソン公爵家とエッジ伯爵家は、親戚関係ではあるが縁は薄く、親交がなかったので彼がどんな人なのかマリオンは知らない。

初めて会った時の印象は『怖い』だった。彼の纏^{まと}う空気は重々しいし、表情は陰しく不機嫌そう

に見えた。ダークブラウンの髪と同じ色の瞳は鋭く意志が強そうで威圧感がある。

もしかしたら婚約を迷惑に感じているのかもしれない。

誰もが高位貴族の婿むこに選ばれて喜ぶとは限らない。

「初めましてマリオン様。コンラッドと申します。あなたとベイトソン公爵家のために尽力します。よろしく願います」

「こちらこそよろしく願います」

コンラッドの挨拶の言葉は端的で堅苦しく儀礼的だった。マリオンはすっかり委縮いしやくし、コンラッドに苦手意識を抱いてしまった。

その後、彼は与えられた教育をこなすのに必死で余裕がなさそうだった。

マリオンから話しかけて労わなければと思うのに、上手く話しかけられず途方に暮れてしまう。コンラッドも自分から女性に気安く話しかけるタイプではなかった。

マリオンの社交界デビュー後に正式に婚約を結ぶことになっているのに、二人の距離は縮まらない。今のマリオンにできることはコンラッドの負担を減らすためにいつそう勉強に励むことだった。これといった交流が進まないまま二か月がすぎた頃、意外なことにコンラッドが声をかけてきた。お茶に誘われたのだ。

気まづげに始まったお茶の時間は沈黙が多かったが、コンラッドが意を決したように口を開く。

「マリオン様。これをどうぞ」

「まあ。ありがとうございます」

口を引き結びながら彼がマリオンに差し出したのは、可愛くラッピングされたピンク色の小さな箱だった。

「開けてもいいですか？」

「はい」

ぶつきらぶうな返事にしゅんと眉を下げながらも箱を開ければ、中にはガラスでできたうさぎの置物がちよこんと入っていた。

「まあ、かわいい！ コンラッド様を選んでくださったのですか？」

思いがけないプレゼントが嬉しくて、それを胸に抱きしめ彼を見上げた。

「ええ。気に入って頂けたならよかった」

言葉とは真逆のニコリともしない表情と平坦な低い声に、喜びがみるみる萎みしぼ申し訳なさでいっぱいになった。マリオンに気を遣ってくれたのだろう。

そういえば彼はこの婚約をどう思っているのか確かめたことがなかった。

もし思う女性がいたのならマリオンはそれを邪魔したことになる。

「コンラッド様には気を遣わせてしまい申し訳ございません。この婚約は公爵家の都合によるものです。コンラッド様にはきつとご迷惑だったのでしょうか……」

マリオンの謝罪の言葉にコンラッドは驚いたように目を丸くした。

すぐに否定するように首を振る。

「迷惑などではない。むしろありがたい話だ。ああ、私の態度が悪くてマリオン様にそう思わせて

しまったようだ。すまない。その、私はずっと騎士団にいたので女性に対して不慣れだ。気が利かない自覚はあるのだが……せめて何か贈り物と思って……」

必死に弁解しようとする言葉に彼が歩み寄ろうとしてくれていたことを知る。

もしかしたらマリオンと同じで、人と距離を縮めるのが得意じゃないのかもしれない。勝手に嫌われていると思い込んでいたが、話もせずに決めつけたことを反省した。

「そう思ってたこと、とても嬉しいです。あの、コンラッド様に聞いておきたいことがあるのですが、いいでしょうか？」

「ああ、何でも聞いてくれ。私たちはまず話をするところから始めなくてはならないな」

確かにそうだ。マリオンは頷いた。

「コンラッド様には想う女性はいらっしゃらなかったのでしょうか？ もしその女性との仲を裂いてしまったことになっていたのなら……」

それでも両親が決めた婚約者であり、家の柵があるのでマリオンには婚約をなかったことにはできない。聞いても仕方がないとはいえ、いずれマリオンの両親のように跡継ぎが生まれたら愛人を囲うかもしれない。

その覚悟をしておきたかった。

「いや、いない。このとおり愛想がないので女性には敬遠されていた」

「そうなのですね」

マリオンはホッと安堵^{あんど}の息を吐く。

「あの……マリオン様にも想う相手は……いなかったのだろうか？」

言い淀むような問いかけにマリオンは目をぱちくりとした。

「私に、ですか？ いません。あの、男性の友人もないので」

「そうか、それならお互いに問題ないな。よかった。私は、その……できればマリオン様と信頼関係を築いていきたいと思っている」

コンラッドが少し視線をずらし目元を赤くした。

照れているのかもしれない。それに気付くと微笑ましくなり思わず口元が綻んだ。

これが彼の本心なら自分と同じ不器用な人なのだ。

でも精一杯歩み寄ってくれている、それなら自分も頑張ろう。

「私もです。私もコンラッド様と信頼し合える夫婦になりたいです」

同じ気持ちだと伝えたかったのだが、自分の言葉にマリオンは顔を赤くした。『夫婦』と言ったのは先走りすぎたように思う。ちらりとコンラッドを見ると彼も気恥ずかしそうな顔をしていた。

その日から食事は一緒に摂ることを約束した。

一人で摂る食事と違い、二人での食事には会話がある。内容は勉強の進捗^{しんちよく}だったり、コンラッドが騎士団にいたときの様子などだったりした。

無口なイメージだったのに、彼は思いのほかたくさん話をしてくれた。

なんて楽しいのかしら！

いつもの静まり返った食堂にコンラッドの大きな声が響いて賑やかになる。食事が美味しいと

思ったのは初めてだった。

屋敷内でも慣れるためにと彼がエスコートをしてくれる。

背の高いコンラッドの腕に手を添えるのは少々大変だが、段々慣れていった。会話も緊張しない。打ち解けてきた頃合いを見て、どちらかともなくお互い名前を呼び捨てにしようと決めた。

その方が早く心の距離が近くなるからと。

コンラッドの口調はぶつきらぼうだがマリオンに気を配ってくれていることがわかる。彼はとても優しい人だ。マリオンはすっかり彼に心を許せるようになった。

ある日二人で休憩をしているとき、コンラッドが眉間に皺をよせ強い口調で言った。

「マリオン。あなたは頑張りすぎだ。そんなに一人で頑張らないでくれ。私はあなたを支えるためにここにいる。とはいえまだ足を引つ張ってしまっているが、すぐに追いついてみせる。だからこれからは一緒にやっていこう」

「えっ？」

一見不機嫌そうで怒っているように見えるが、そうではないと知っている。

これは心配してくれているのだ。

マリオンには一人で頑張っているという意識はない。

ただ、幼い頃から家を継ぎ女公爵になるのだという意識は強かった。マリオンにとってそれは、決められた将来であり、たった一つの存在意義だったから。

その気負いが無理をしているように映るのかもしれない。

でもマリオンは子供の頃から家庭教師にこう言われてきた。

「公爵家を継ぐことの意味を理解し、すべてをこなせるようになりなさい」

「侮られないように完璧でいなさい」

「血を吐くほど努力をしてもまだまだ足りません。もっと精進しやうじんなさい」と。

そう告げると、コンラッドは悲しそうな表情で首を横に振った。

「それは厳しすぎる。マリオンはよくやっている。まだ十五歳だろう。いまずぐ完璧になる必要はないと思う。それに使用人たちがあなたをととても心配している。それに気付いているかい？」

「心配？」

首を傾げ心当たりを探す。

そういえば侍女が休憩を何度も勧めていたが、区切りが悪いと言いつつ休んでいなかった。彼女は寝る前にはリラックス効果のあるお茶を用意してくれていた。

体調が良くないときには何も言わなくても胃に優しい料理が出てくる。

部屋にはマリオンの好きな花がいつも活けてある。

それを当然のように感じていたが、みんなマリオンのためにしてくれていたのだ。

コンラッドの言葉で自分の余裕のなさや視野の狭さに気が付き、愕然がくぜんとした。いずれ公爵家の主になるのだと意気込んでおきながら、周りがまったく見えていない。それでは駄目だ。

俯うつむき両手を膝の上で握りしめながら自分の至らなさを責める。

「気付かなかったわ。ごめんなさい」

するとマリオンの手を大きく硬い手が優しく包み込んだ。

それは温かくて、まるで心ごと抱きしめられているように感じた。

思わず顔を上げるとコンラッドが柔らかに微笑んだ。

初めて見る微笑みに胸がトクンと鳴る。

「反省するのはマリオンらしいが……そこは素直に感謝すればいい。ありがとうと伝えれば、みんなもきっと喜ぶ。それに責めているわけじゃない。もっと自分を大切にしてほしいだけ。いいね？」

「はい……」

嬉しくて、とても嬉しくて涙が零れそうだった。

両親が自分に關心がないことで、まるでこの世界にマリオンを心配してくれる人はいないような気持ちになっていた。でもそれは自己憐憫に浸っているだけだ。

コンラッドが側にいてくれるようになってマリオンの世界は広がった。

使用人たちの温かさを知ることができた。

自分は孤独じゃなかった。たくさんの方がいる。

マリオンはもう寂しいとは思わない。何よりもコンラッドがいてくれる。

——マリオンはこの日から、切羽詰まった思いから解放され穏やかな気持ちで日々をすごせるよ

うになった。

使用人に「ありがとう」と伝えればみんな嬉しそうに微笑んでくれる。コンラッドのおかげだ。

彼が婚約者で本当によかった。それだけは心から両親に感謝した。

あまりに幸せすぎて怖くなってしまふほど。でもそれは杞憂だ。あともう少し、マリオンが社交デビューしたらコンラッドと正式に婚約し一年後には結婚する。

その日が待ち遠しい。自分が何かを楽しむにできる日が来るなんてびっくりだ。

私は、きつと幸せになれる。

最近のコンラッドはよく笑うようになった。厳めしい顔なのに笑顔はどこか可愛い。その笑顔が見られると褒美をもらえた気持ちになる。

二人でいるとき、マリオンはコンラッドをこっそり観察した。

そしてわかったのは見かけによらず甘い物が好き。だけど豆が苦手で食べるときは眉をぎゅつと寄せる。でも残さないのはえらい。考えごとをしていると人差し指を机に五回トントンするのが癖。そんなふうに彼を知るのは楽しかった。

マリオンは十六歳になるとコンラッドのエスコートで社交界デビューをした。

彼と選んだデザインのドレスはお気に入りの一着。コンラッドは顔を真っ赤にして「似合っている」と言ってくれた。きつと同じくらい自分の顔も赤くなっている。

二人で沢山練習したダンスは緊張しながらでも上々のできた。彼が側にいてくれるだけで心

に余裕ができて、貴族たちとの会話も緊張せずにすんだ。
マリオンの人生の中で最高に幸せな一日だった。

——その夜、夢を見た。

コンラッドに似た小さな男の子を真ん中にしてコンラッドと自分が手を繋いでいる。公園をゆつくりと笑いながら歩く。

多幸感に包まれながら「ああ、これは夢だ」と気付いた。その瞬間に目が覚めた。

頬に触れると濡れている。マリオンは指で涙を拭うとくすりと笑った。

これは悲しくて泣いたのではない。心の中でずっと憧れていた光景を、叶う前に一足先に夢見ることができて嬉しかったのだ。素敵な夢がもうすぐ現実になる。

窓を見ればまだ薄暗いのもう少し眠ることにした。

目を閉じたけれど、あの幸せな夢の先を想像してしまい、なかなか寝付けなかった。

社交界デビューを終えるとすぐに婚約の書類を提出するはずだったのに、なぜか父が待ったをかけた。大丈夫だと思いつつも心の中に不安が滲みだす。

コンラッドも困惑しているのがわかる。あえて二人ともそのことは話題にしなかった。

それから一か月後、コンラッドと一緒に父の執務室に呼ばれた。

ようやく婚約が結ばれたのだと、安堵しながら二人で目を見合わせ微笑んだ。

部屋に入ると意外なことに母もいた。いつも母は愛人と住む別邸に入り浸っており、本邸には必要最低限しかこない。この二人が一緒にいるのは珍しい。

しかもやけに浮かれている様子に、嫌な予感がした。

「お前たちの婚約は白紙になった。マリオン、喜べ。お前は王太子殿下の婚約者となったのだ！」

「よかったわね、マリオン。私の産んだ娘が王太子妃になるなんて素晴らしいわ！ 栄誉なことよ。

喜びなさい」

「えっ!？」

「えっ!？」

「幸いお前たちの婚約は仮で正式なものではなかった。書類も出していなかったし、本当によかった。デビューのエスコートは親戚だから問題にはならないだろう。ただいつまでもコンラッドが屋敷にいと穿った見方をする人間もいる。早々に出て行ってもらいたい。エッジ伯爵には説明して了承を得てある。それに託びとしてかなりの金を渡してある。いいな」

マリオンは頭の中が真っ白になった。顔色も悪いはず。

コンラッドを見れば彼も呆然としていた。二人とも黙ったままだった。

「どうして?」「いやよ」「王太子妃になんかなりたくない」「コンラッドと結婚したいの」

マリオンは心の中で叫んだ。

でも両親に対し従順に生きてきたマリオンには、それを口に出すことができなかった。

愛されていないなくても、それでも見捨てられなくなかった。

—— 幸せはこの手に掴む寸前で泡のように儼く消えた。二人で生きる未来はこうして終わってしまった。

父はすぐにコンラッドを追い出してしまったので、マリオンはお礼もお別れの挨拶もできなかった。

マリオンは悄然としたまますごし、夜になると侍女に促されて食事のために食堂に向かう。大きなテーブルには一人分のカトラリーが並んでいる。いつもは向かいにコンラッドの分もあった。

席に着くと給仕がスープを皿に注ぐ。スプーンを手に取り口に運ぶが味がしない。

コンラッドがいない。彼の話声が聞こえない。

ふいに喉が詰まり鼻の奥がつんとした。

「っ……」

涙が頬を滑り落ちていく。テーブルにポタポタと染みができる。

寂しい。コンラッドはもうここにいない。二度と戻ってこない。

「今日は……食べられそうにないわ……」

スプーンをテーブルに戻すと席を立つ。

「お嬢様……」

侍女は心配そうにしていたがマリオンはそのまま部屋に戻った。

ベッドに横になり枕に顔をぎゅっと押し付ける。

「コンラッド。あなたが好き……好きなのに……」

彼に好意を抱いているとわかっていたが、明確に自覚すると恥ずかしくなってしまうようで自分の気持ちに正面から向き合えなかった。

言葉にして想いを告げたことはない。

でもコンラッドならわかってくれると思っていたし、結婚してから伝えようと思っていた。

だってずっと一緒にいられるはずだったから。

それなのにもう会えない。もう伝えられない。コンラッドが好き。彼と一緒にいたかった。せめて伝えておけばよかった。マリオンの心に後悔が押し寄せる。

コンラッドが誉めてくれたから自分に自信が持てるようになった。

彼が側にいてくれるから寂しくなくなった。

生きているのが楽しい、幸せだと知ることができた。

何よりも自分が必要としてくれる人、そして自分にとって大切な人に出会えたと思ったのに……マリオンは実るはずだった初恋を失った。

王太子クリフトンはマリオンより二歳年上で、婚約者候補が二人いた。

一人はブラックストン公爵令嬢エレン、もう一人はブリュール伯爵令嬢ライラ。

ライラの母親と王妃様が親友同士であることからライラが有力だと思われていたが、爵位しやくいの低さから多くの貴族から反対の声が上がっていた。身分を踏まえエレンに内定していたはずなのに、どうして突然マリオンに決まってしまったのか。

高位貴族の結婚は親が決める。マリオンの意志で断ることは不可能だ。しかもこれは王命。

もちろん伯爵子息ではないコンラッドにだつてどうすることもできない。

そうわかつていても、心が受け入れることを拒否していた。

後日知ったのは、エレンが隣国の王太子殿下に見初められ婚約の打診があり、それが正式に決まったということ。そのためクリフトンの新たな婚約者候補が必要になったのだ。

王妃様は再びライラを推したそうだが陛下が難色を示し、結果年齢と爵位しやくいを考慮こうりよしマリオンに決まった。それも候補ではなく正式な婚約者に。

父は愛人に産ませた子にバイトソン公爵家を継がせることに決めた。

母は不満に思っていたようだが、公爵家の血を残すためには仕方がない。自分が産んだ子であるマリオンが王太子妃になることで納得した。

「どうして……神様はひどい……幸せを夢見させて……手が届きそうになった直前に取り上げるなんて……」

貴族の娘の義務だと理解していても心は追いつかなかった。

それに王太子殿下の婚約者になるということは、ゆくゆく王妃になるということ。

それはマリオンの器ではないし、自信がない。

社交界を束ね、クリフトンと国を導く未来を想像できない。

——でも現実は無情だった。

マリオンは悲しみに浸る暇もなく、結婚式までの期間が短いからと、クリフトンとの顔合わせもしないうちから、早々に王太子妃教育のスケジュールをこなすことになった。

公爵家を継ぐ勉強とは比にならないほどの大変さに毎日くたくたになる。受け入れきれない現実を悲しんでいる余裕すらなくなったのはむしろ救いかも知らない。

一か月が経ち、正式にクリフトンとの顔合わせの日が決まった。彼はずっと公務で地方に行っていて不在だったので延期になっていたのだ。

マリオンはクリフトンと話をしたことはない。評判はいいが実際はどんな人なのか、上手くやっ
ていけるのか、不安で眠れず胃もきゅつと痛む。

顔合わせの前日、コンラッドから手紙が届いた。侍女が父に内緒で渡してくれた。どうやら取
次がないように指示されていたらしい。

侍女にお礼を言うのと部屋に入り、深呼吸をして手紙を開いた。

『マリオンなら大丈夫、自信を持って。あなたの幸せを祈っています』

彼らしい短い文面だった。

コンラッドは知っている。マリオンが不安に押し潰されそうになっていることを。幸せ？ あなたがいないのに幸せになてなれない。

王太子妃教育で心が麻痺していたが、コンラッドを思い出し悲しさが再燃する。手紙を胸に抱きしめ声を押し殺しながら涙を流した。しばらくして泣き止むと、マリオンはそれを鍵のかかるオルゴールの中に隠すようにしまった。

——所詮、私と殿下の婚約は、貴族内のバランスを取るための政略的なもの。

クリフトンもきつと仕方なく受け入れたのだろう。彼は幼馴染のライラを愛しているという噂だ。それを知り、最初の顔合わせでマリオンは酷く緊張した。冷やかな態度を取られると思ったのだ。それはそうだろう。ようやく本当に好きな相手と婚約できそうだったのに、別の女になってしまったのだ。

ところがクリフトンはマリオンに対し穏やかな微笑みを向けた。

マリオンの顔は強張ったままだが、少しだけ緊張が解けた。

「マリオン。これからよろしく頼む」

「はい。こちらこそ、至らぬ身ではありますが精一杯務めさせていただきます」

クリフトンは鷹揚に頷いた。

交流を重ねていくが、彼はひたすらに優しく傲慢な態度を取ることはなかった。

婚約者だから当然だと、たくさんのアクセサリやドレスを贈られた。豪華で高価な品々に気後れしてしまうことはあったが、クリフトンは模範的な婚約者だった。

だからマリオンは、クリフトンに真摯に向かい合おうと決めた。

彼も愛する人と結ばれるのを諦めてマリオンと向き合ってくれている。

勝手に同志のような気持ちになっていた。

(彼の役に立てるように頑張らなくては)

ただ王太子妃教育は厳しく、教師たちは叱責を繰り返した。

もともと自尊心が低く内気で自分に自信がなかったマリオンの心はボロボロになった。コンラッドが与えてくれた自信をすっかりと失くしてしまった。

(コンラッド。あなたは大丈夫だと言ってくれたけれど、挫けそうだわ……)

クリフトンはマリオンが社交場でミスをしてフォローをし、優しくアドバイスをしてくれた。すぐありがたいと思う。それなのにマリオンはどうしても心を開くことができない。

本心では、王太子妃という立場からも、クリフトンからも逃げてしまいたかった。

妃教育の後の二人ですごくお茶の時間、クリフトンはきまって「マリオンはよくやっている」と労ってくれた。

その言葉を聞いて後ろめたく思うのはどうして？

頭の中に一瞬コンラッドの顔が浮かんで消える。マリオンはそれを誤魔化すように微笑んだ。

「殿下。まだ時間は大丈夫ですか？ 次の公務が迫っているのでは……私のために時間を使いき

ては侍従^{じじゆう}たちに怒られてしまいます」

クリフトンのスケジュールは過密だ。いつだって次の公務の予定がある。これ以上気を遣わせるわけにはいかない。

それに先日、王妃様にクリフトンの足手まといになるなど厳しく叱責^{しっせき}されたばかりだ。

「大丈夫だ。侍従^{じじゆう}も婚約者とすぐす僅かな時間を、邪魔するような無粋^{ぶすい}な真似はしないだろう。気にしなくていい」

「……はい。ありがとうございます」

クリフトンには感謝している。彼にとつて不本意な婚約であるのに、それをおくびにも出さずに優しくしてくれる。正直なところコンラッドと同じ想いを抱くことはできないが、王族でありながら自分を笠^{かさ}に着ない姿を尊敬していた。

彼と結婚することは覆らない。それならば良好な関係を築きたい。

きつと上手くいく。そう信じて努力を続けた。

それなのに――

気付けば二人の間には大きな溝ができていた。きつかけはわからない。

ある日を境に、クリフトンのマリオンに対する態度は冷淡なものになった。

なぜ？ クリフトンはいつの間にかマリオンを見ると不機嫌そうに目を細める。

それでも夜会のエスコートはしてくれるし二人きりのお茶会を反故^{はぐ}にされたことはない。

婚約者としての義務を疎かにはしないが、その態度は冷ややかだ。

二人でいる時間は針^{はり}の筵^{むしろ}で息苦しい。むしろ義務を放棄してほしいと思うようになった。

耐えられなくなり、とうとうマリオンは訊ねた。

「殿下。私何が失礼をしてしまったのでしょうか？ 直します。どうか教えてくださいませ」

「マリオン。理由に心当たりはないのか？」

「はい。申し訳ございません」

「これは自分で考えなさい」

「……」

クリフトンははねつけた。マリオンは諦めて時間が解決してくれることを祈った。

夜会でクリフトンはファーストダンスを踊るとすぐに、マリオンを置いてどこかに行ってしまう。

マリオンは壁の花になった。周りの貴族はクリフトンがマリオンを疎ましく思っていると察して

話しかけてこない。令嬢たちは見下すようにくすくすと笑う。

辛い……何もかも捨てて逃げてしまいたいと何度も思った。

ぼんやりと俯^{うつむ}いていると声をかけられた。

「ベイトソン公爵令嬢。あちらに綺麗な花が咲いていました。夜に咲く花です。月明かりに照らされて幻想的ですよ。よかったら一緒に見に行きませんか？」

マリオンは眉を顰めた。たとえ疎まれていても自分は王太子の婚約者だ。ダンスに誘うなら理解できるが夜会会場を抜け出して庭に誘うなど非常識だ。

「申し訳ございませんが、不要な誤解を招くようなお誘いはお控えくださいませ」

はつきりと拒絶の意を伝えたが、その男性はニヤニヤといやらしい笑みを浮かべた。マリオンは記憶を辿ったが彼がどこの家の者なのか心当たりがない。きつと嫡男ではない子息だろう。

「王太子殿下はあなたのことを放っていますよ。だから大丈夫です。それに一緒に来ればきつと楽しい体験ができますよ」

その言葉にゾツとした。粘着質^{ねんちやくしつ}な眼差しに鳥肌が立つ。

もしもこの男性とのが噂になれば間違^{まちがひ}いなく醜聞^{しうぶん}になる。ベイトソン公爵家もマリオンも立場を失う。それにコンラッドに知られたら……彼に軽率な女だと誤解されたくない。

怯えているだけでは駄目だ。

誰かの助けを期待できないのなら、自分で自分を守らなくてはならない。

「……お断りします」

すぐさまその場を離れようとしたが、すかさず腕を掴まれた。

「放してください！」

「マリオン様。お静かに。騒げば私はあなたに誘われたと殿下に言いつけますよ？」

「そ、そんな」

周りを見渡したがみんながそれぞれ自分の社交に夢中で、マリオンを気にかける者はいない。

王太子の婚約者に対する扱いではないが、クリフトンがマリオンを蔑^{ないぢ}ろにしているので貴族たちが同調している。

そしてマリオン自身が、蔑^{さげす}まれる視線が辛いと人混みから遠ざかったのがあだとなった。会場の

隅で隠れるようにすごしたのは失敗だ。堂々としているべきだった。

マリオンは男性に掴まれた腕を振りほどこうとしたが敵わない。強引に腕を引っ張られ庭の方へと引きずられていく。

「いや、放して。誰か助けて」

恐怖に耐えられず夢中で声をあげた。でも誰も気づいてくれない。

「誰も来ませんよ。せつかくだから楽しみましょう？」

男は下卑^{げび}た笑みを浮かべた。

マリオンの目には恐怖と悔しさで涙が浮かんでくる。足を踏ん張っても抵抗にすらならない。

（怖い。お願い。誰か気付いて。誰か助けて）

そのとき――

「ベイトソン公爵令嬢様。どうされましたか？」

夜会の警備の騎士がマリオンの様子に気付いて声をかけてくれた。

この声は……懐かしいあの人の声。

やはり顔を見ればコンラッドだった。思わず縋^{すが}るように彼に手を伸ばした。

「たすけて……」

男性はすかさずマリオンを背に隠しコンラッドから遠ざけようとした。

「何でもない。マリオン様が体調を崩されたので静かな場所へ案内するところだ。騎士風情が余計な口出しをするな」

男は威圧するように言ったがコンラッドは冷静だった。

引き下らずに目を細めると低い声で告げる。

「あなたはコンロン侯爵子息ケイシー様ですね？ 先日アルダン子爵夫人との密会が見つかり御夫君と立ち回りがあつたと記憶しています。いいのですか？ このことを侯爵様が知ったらどうなるでしょうね？ 四男のあなたは嫡子のスペアですらない。侯爵様が何度も助けてくれるでしょうか？」

彼は侯爵子息だったのか。さつきからの強気な言葉は身分ゆえ。何かあっても父親がもみ消すと思っているのだろう。

「父上に告げ口する気か？ 卑怯な……」

コンラッドはふつと片方の口角を上げた。

「お前ほどではない。王太子殿下の婚約者に手を出したとなれば侯爵様も庇えまい。家がどうなるか、自分がどうなるか想像したらどうだ？」

「……どうせ殿下に見捨てられていくくせに！」

侯爵子息はマリオンに捨て台詞を吐くと忌々しそうに舌打ちをする。マリオンの手を乱暴に放すと足早に去って行った。

「助かった……ありがとうございます」

気が抜けて足の力が入らずへなへなとその場に座り込んでしまった。

「大丈夫ですか？ 王太子殿下のところまでお送りしましょう」

嫌だ。クリフトンのところには戻りたくない。

「いいえ、殿下のところではなく馬車止めに連れて行ってくれますか？ 屋敷に帰ります」

「ですが……」

「お願いします」

「わかりました」

コンラッドはマリオンをそつと抱き上げた。遠慮するべきだと思ったが、気持ち折れて歩けそうにない。だから甘えてしまった。

（今だけ……今だけだから）

このままクリフトンのもとに戻っても鬱陶しがられる。もしくは誤解をされて、ふしだらだと叱責されるかもしれない。

それならばもう帰りたい。ファーストダンスも踊り最低限の義務は果たした。

これ以上会場にいてもマリオンは役に立たないのだから。

コンラッドの腕の中は温かくて安心できる。抱きかかえる腕はマリオンを守るように力強い。

コンラッドと一緒にすごした一年間、体温を感じるほど近くで触れ合ったことはなかったが、懐かしい匂いに包まれてホッとした。本当はずっとこのままコンラッドといたい。

（もしも、このまま二人で逃げることできたら……）

コンラッドの顔を見たら、耐えられずに涙がこぼれた。

「うつ……」

するとおろおろとした声が聞こえてきた。

「マリオン。大丈夫か？ いや大丈夫ではないな。怖い思いをしたのだから。でももう大丈夫だ。あとマリオン……すまない。私はハンカチを持っていない。だから泣かないでくれ」

「ハンカチ……」

以前の話し方に戻ったことが嬉しい。

そしてぶっくらぼうだけれど心の底から心配してくれているのは、その声からわかる。

何よりもハンカチを持っていないのがコンラッドらしくて、涙が引っ込んで笑いそうになった。マリオンは自分の指で頬の涙をそっと拭った。

「大丈夫よ。ありがとう」

馬車止めでおろしてもらうとコンラッドの顔を見上げた。

どこか切なそうな表情にマリオンの心は苦しくなった。

「ベイトソン公爵令嬢様。どうぞお気をつけて」

それはお互いの立場を思い出させる言葉だった。

マリオンは公爵令嬢で王太子の婚約者、コンラッドは爵位を持たないただの騎士。

数か月前までは私たちは婚約者同然だったのに、まるでその事実がなかったことになっている。それが酷く悲しい。

マリオンは一度目を閉じ、そして淑女の仮面を着けて微笑んだ。

「騎士様。助けてくださり本当にありがとうございます」

コンラッドは頭を下げマリオンの乗る馬車を見送った。

これが私たちの距離。もう気安く話することはできない。マリオンは馬車の中で静かに涙を流した。そして自分の恋心を再び心の奥底にそっとしまい、鍵をかけた。

屋敷に戻るとオルゴールを開け、コンラッドからもらった手紙を取り出した。彼らしい豪快な文字をそっと指でなぞる。それは自分を慰める儀式だった。

それから数日後、マリオンが不貞を働いているという噂が流れ始めた。

夜会でクリフトンの目を盗み男性と密会していたという目撃証言まで出た。

噂を流したのはコンロン侯爵子息だった。先日の腹いせだ。

歩けなくなったマリオンをコンラッドが抱きかかえて運んでいたところを見た人間がいたことで、余計に噂が大きくなった。抱き合って口付けを交わしていたと誇張されている。コンロン侯爵子息は調子に乗り、それを触れ回っている。

マリオンは不貞なんてしていない。問われれば弁明できるが、誰にも直接訊かれたことはない。もちろんクリフトンは噂を知っているはずだ。それなのに問い質さない。

今の二人の関係を思えば信じてもらえないだろう。だからといって疚しいことはないのに、自分から言い訳をしたくない。

——数日後、クリフトンは噂ではなく別のことを問いかけてきた。

「……マリオン。私をどう思っている？」

一体なぜそんなことを聞くのか不思議に思ったが、クリフ톤はじつと答えを待っている。

「もちろん尊敬しています」

マリオンは本心を告げたが、クリフ톤は不満げに顔を曇らせた。

でもこれ以外の返事は思いつかない。何を言えればいいの？

機嫌を取るために媚びるような嘘も吐けない。

翌日、クリフ톤は夜会が終わるなりマリオンを別室に連れて行つた。そこにはなぜかライラがいる。ピンク色の垂れ目の瞳が潤み、マリオンに対し敵意をあらわに睨んでいる。

「マリオン。ライラがこの手紙を拾った。お前が書いたもので間違いないか？」

心当たりはないが確かめるために、それを受け取り広げて確認する。

サツと目を通すと唇をぎゅっと噛んだ。その内容はマリオンが男性に愛を囁くものだ。文字はマリオンの字によく似せられていたが、マリオンが書いたものではない。

クリフ톤はこれをマリオンの浮気の証拠だと突きつけた。

「これは私が書いたものではありません。文字は似せてありますが、違います」

「見苦しいぞ。筆跡鑑定もしてある」

「そんな……」

本当に鑑定をしたのだろうか。よく見れば細かいところが違う。素人はともかく専門家なら見分けられるはずなのに。

「殿下。鑑定結果は何かの間違いです！ お願いします。もう一度詳しく調査をしてください」

きちんと調べればこれが偽造だとすぐにわかる。マリオンの無実は証明されるはずだった。

それなのにクリフ톤は必要ないと突っぱねた。

「マリオン様。本当のことを言ってくださいませ。夜会のために騎士と抱き合っていたという目撃者もいるのです。認めればクリフ톤様もわかってくれます。それで婚約を破棄すればいいのですもの」

ライラは諭すように優しく言うが、認めるわけにはいかない。

「それは誤解です。抱き合っていたのではなく、具合が悪くて歩けない私を騎士様が支えてくださっただけです」

嘘の噂を認めて婚約を破棄されることは別にいい。自分はどうなってもいいが、不貞を認めてしまつと一緒にいたコンラッドも処断されてしまう。絶対に彼を巻き込みたくない。

「本当ですか？ 二人は見つめ合つて口付けをしていたと——」

「ライラ、もういい!! マリオンを牢へ！」

クリフ톤は騎士に命じマリオンを牢屋へ放り込んだ。

貴族用ではなく平民の罪人が入る場所だった。じめじめしていてカビ臭い。マリオンは膝を抱え恐怖に体を震わせながら、そこで一晩すごした。

「殿下は……どうして私を信じてくだらないの？」

少しずつではあるが信頼関係を築けていたと思つたのはマリオンの独り善がりだったのか。

カビ臭い暗い牢の中で眠れるはずもなく「なぜ、どうして」と自問自答を繰り返す。

コンラッドへの想いを閉じ込めて、彼の婚約者として必死にやってきたのが無駄に思えた。

一睡もできないまま朝になる。

両親はマリオンを見捨てたのだらう。そうでなければ抗議をして屋敷に連れ帰ってくれるはずだ。

それが無理でも貴族用の牢に移動できたはず。

マリオンの心は折れてしまった。

コンラッドを失い、両親に見限られ、クリフトンには憎まれている。

「もう、疲れた……」

夕方になると牢にクリフトンが現れ、蔑むような眼差しを向けられた。

そして再び昨日と同じ質問をされた。

「マリオン、不貞はないと断言できるのか？」

「不貞などしておりません」

疚しいことなど何もなかった。

コンラッドは助けてくれただけ。マリオンは彼の名前すら呼んでいないのに。

「……マリオン。私をどう思っている？」

クリフトンは何かを見極めようとするようにじつと自分の表情を見ている。

またこの質問……彼の意図がわからない。マリオンにとって答えはひとつしかない。

「殿下を尊敬しています」

「そうか」

彼はゆるく首を振るとスッと表情を消した。

そして腕をマリオンに向かって差し出す。彼の掌には小瓶が握られている。

マリオンは目を見開くとそれをじつと見た。信じられなかった。

王太子妃教育で習った王家の秘毒……黄色い小瓶。万が一のときの自害用の物。優しかったクリフトンが不貞の噂だけでここまでマリオンを追い詰めるのか。

最悪の場合、せいぜい婚約を破棄して修道院に送られるだけだと思っていた。

まさか死を迫られるなんて。

「殿下……」

それを力なく受け取るとぼんやりとクリフトンを見上げた。

「マリオン。これを飲め」

彼は私に死んでほしいの？

それほど憎まれていたなんて……もう、どうなってもいい。

マリオンは毒の入った小瓶の蓋を開けるとそのまま飲み干した。甘い……毒は苦いものだと思っていたが、さすが王家の秘毒だ。そんなことを考える自分が可笑しくて心の中で嗤った。

ありがたいことに苦しさは感じない。

ただ少し目が回って床に倒れた。目を開くと薄汚れた天井が見える。

マリオンはゆっくりと目を閉じた。瞳から涙が零れ落ちる。

自分がなぜ泣いているのかわからない。悔しいのか悲しいのか、でもすぐに全部終わる。意識が消える直前、淡い想いを抱き続けた愛しい人の顔が浮かんだ。

(コンラッド。どうかあなたは幸せになつて……)

そのまま意識を失った。

シンシアの前世、マリオンの人生はこうして終わつた。

◇

シンシアが身支度を整え朝食を摂るために食堂へ向かうと、そこにはすでに家族が揃っていた。一瞬、泣きたくなるような気持ちになつた。

ああ、これはマリオンの感情だ。彼女はずっと『家族が笑顔ですごく光景』に憧れていた。運命が狂わなければコンラッドと築けたかもしれないかったもの。

「おはようございます！ 姉上」

十歳になる可愛い弟ルイスがシンシアの顔を見るなり満面の笑顔で挨拶をしてくれた。子供特有の高い声は元氣いっぱいだ。その声にシンシアは我に返り微笑んだ。

ルイスの顔を見ただけで前世の苦しい記憶があつという間に浄化される！
すごいパワーね。

「おはよう、ルイス。お父様、お母様、おはようございます」

「おはよう、シンシア」

「おはよう。今朝はお寝坊かしら？ 珍しいわね」

お母様が押揃う。

普段シンシアは目覚めがよく、多少夜更かししたくらいでは寝坊することはない。今朝は前世の記憶をつらつらと思い返していたら支度に時間がかかり遅れてしまったのだ。

「お待たせしてごめんなさい。昨夜読んでいた小説が面白くて寝過ぎしてしまったの」

「まあまあ。夜更かしはほどほどにね？」

「はい、お母様」

シンシアが席に着くとすぐに朝食が給仕される。にこやかに会話を楽しみながらパンを手取る。

今世の私は、バルフォア公爵家の娘シンシア。

そしてこの国の王太子殿下の婚約者でもある。

今世も公爵令嬢でさらに王太子殿下の婚約者……代り映えがしない？

いやいや、そんなことはない。全然違う。

朝からこの幸せいっぱいの光景は前世と真逆でしょう？

シンシアは柔らかいパンにたつぷりとジャムをつけて頬張る。ちよつと塩味のきいたパンと甘いジャムが最高。もぐもぐと咀嚼しながら再び前世を思い出す。

マリオンはもとの性格もあるが環境のせいで気が弱すぎたと思う。

自分の気持ちを心に閉じ込めて、文句も言わずに王命で決められた婚約者に尽くして、自死を迫

られそれをあつまり受け入れる。

なんだ、それは!!

無実の罪なのに……たとえどうにもならなくてもせめてそこは大声で言い返せばいいのに。シンシアなら黙って死んだりしない。クリフトンの頬をひっぱたいて牢から逃げる。

それが無理なら毒の瓶を開けて中身をクリフトンにぶちまけてやる!

その状況を想像しながら勢よくサラダを頬張り、オレンジュースを飲み干した。

命はとても大切なもの。簡単に諦めては駄目。足掻いて欲しかった。

王太子が横暴な行動を取っている以上、拒否しても無理矢理毒を飲まされる可能性は高い。運よく生きていたとしても逃れるあてもない。それでも可能性はゼロではない。

いや、無理か。マリオンには味方がいない。どうすることもできなかった。

そもそもクリフトンは最低だ。マリオンの不貞を疑うけれど、自分だって夜会の度にマリオンを放り出して、ライラとくっついてダンスをしていたじゃないか。

それなら陛下を説得して初めからライラと婚約すればよかったのに。

そうすればマリオンだってコンラッドと幸せになった。

(まあ、終わったことを憤ったところでどうしようもないわ。無駄なエネルギーを使うのはもったいない。それより今の幸せを大切にしよう)

シンシアは食事を進めながら家族の顔をゆっくりと眺めた。

シンシアの父ルーベン・バルフォアはこの国の宰相をしている。常に多忙だが極限まで仕事を調

整して家族との時間を大切に、家族想いの自慢のお父様。

金髪碧眼で整った顔の父は昔から女性に人気があり、現在も秋波を送られるほど。

でもそんなものに見向きもせず、妻への愛を貫いている。

母メイジー・バルフォアは明るいブラウンの髪に同じ色の瞳を持つ。

若いときは『美人まであと一歩令嬢』と誉めているのだから貶しているのだからわからないことを言われていたらしい。ほとんどが父を好いていた女性の嫉妬からくる言葉だったと聞いている。

現在は公爵夫人としての気品と振る舞いがくだらない戯言を払拭しているので、文句を言う人はいない。まあ、いてもお父様が黙らせると思う。

シンシアから見たお母様は清楚で落ち着いていて、とても素敵な女性だ。

自分の目指す姿でもある。

ちなみにシンシアの容貌はお母様にそっくりなので、一部の貴族令嬢から同じ表現を使われることがある。でも気に病んだことはない。

美人まであと一歩なら一歩前に出れば美人ということだもの。すなわち私はその気になればいつだって美人になれるちゃうということね! と前向きに受け止めた。

その考え方ができるようになったのは、あることがきっかけだった。

幼い頃、同じ歳頃の令嬢に「シンシアちゃんの髪は茶色でつままないね」と言われ泣いたことがある。その子はキラキラと輝く金髪だった。

シンシアは大好きなお母様と一緒に嬉しかったのに否定されて悲しかった。その話を聞いた

お父様は一瞬だけ青筋を立てたが、すぐに優しい笑みを浮かべた。

「シンシアの色はお母様と一緒にどきり素敵な色だよ。甘い紅茶と同じ色だろう？ お父様は見ているだけで幸せになる。他の人は気付いていないから、これは家族の秘密だ」

小さなシンシアは紅茶を飲むときにいつもお砂糖をたっぷり入れていたから、わかりやすくとえてくれたのだろう。

「わたしのちゃいろいかみは、おとうさまをしあわせにしているの？」

「そうだよ」

「うれしい！ じゃあ、もう、かなしくない」

シンシアは両親から否定的な言葉を言われたことがなかった。

些細なことでも成し遂げると大袈裟なほど誉めてくれて、さらにはお祝いをしてくれる。

おかげでシンシアは、自分自身の存在に自信を持っている。

「シンシア、すごいぞ！ もう字が読めるのか!!」

「まあ、シンシア、絵が上手ね」

「天才だ！ 画家になれるぞ」

「シンシアは笑っているだけでいい、無理に勉強をしなくていいぞ」

「メイジ、シンシアのカーテシーが完璧だ。今日は祝うぞ！」

五歳児のカーテシーが完璧なはずがない。お父様は何かにつけてシンシアを誉める。

基本的にはかなりの親ばかだし、シンシアが増長していれば我儘令嬢になつていたかもしれない。

でもいけないことをすればしつかりと叱られたし、何よりも貴族然とした両親の姿を見れば意外と道を踏み外さずにすむものだ。

愛情あつてこそだと思ふ。ああ、家族大好き！

前世のマリオンは内気で自信がない女性だったが、容貌でいえばシンシアよりもはるかに美人だった。燃えるような真っ赤な髪にエメラルドグリーンの大きな瞳は宝石のように美しい。儚げな雰囲気（まじ）を纏（ひ）い底（ひ）意（ご）欲（よく）をそそられる。

でも誉めてくれる人がいないので、その魅力に気付いていなかった。

抱きしめてくれる家族もなく、コンラッドと出会うまで食事はいつも一人だった。

感覚が麻痺（まひ）して、寂しい境遇にいる自覚もなかったように思う。

前世の両親は愛人家族と幸せな団欒（だんらん）を囲っていたのかな。

想像するとマリオンが憐（あは）れで胸が締めつけられる。

（マリオン。今世ではあなたの分まで私が幸せになるから、任せてちょうだい！）

シンシアには弟がいるが、もしもマリオンにも仲のいい兄妹がいれば違う生活があっただろう。

そんなことをルイスを見ながらふと考えた。

弟のルイスは十歳年下、父そっくりの美形で将来が楽しみだ。

食事が終わるとルイスが目を輝かせてシンシアを見ている。

「ルイス。どうしたの？」

「姉上。あのお勉強を見てもらってもいいですか？」

もじもじとおねだりする姿が可愛い！

「もちろんいいけれど、ルイスは勉強しすぎではないかしら？ 遊ぶことも大切よ」

ルイスは公爵家を継ぐための勉強をしている。両親は家庭教師と相談して年齢に合わせて進めているが、ルイスが前のめりで頑張っているのだ。

まだ子供なのだから焦らないでほしいと心配している。

「でも、僕は早く大人になって姉上が王妃様になったときに、臣下として支えられるようになりたいのです！」

シンシアは胸をぐつと手で抑えた。

弟が！ 尊い！ 姉想いで素晴らしいすぎる。シンシアは外に飛び出して「私の弟、可愛いでしょう！」と叫んで世界中に自慢したい気持ちになった。

両親や使用人たちはそんなシンシアとルイスのやり取りを微笑ましそうに見ている。

その後ルイスの部屋に移動して勉強を見るも、弟の賢さに感心するばかり。同じ歳のシンシアはここまで理解していなかったように思う。そう誉めるとルイスは嬉しそうに笑った。

（私はルイスにとって誇れる姉でありたい）

密かに決意していると侍女が来訪者の存在を告げに来た。

「王太子殿下がお見えになっております」

「ブラッドが？ 今日約束をしていなかったはずよ？」

「きつと義兄上は、姉上に会いたくて我慢できなかったのですよ！」

ルイスは教科書を閉じると部屋をバタバタと出て、玄関までブラッドを出迎えに行った。

ブラッド・オールデイスは我が国の王太子でありシンシアの婚約者でもある。二人は一か月後に婚姻を結ぶ。周辺国から要人を招待して大々的な披露宴を挙げるのだが準備はすでに万全だ。

ルイスに急かすように手を引かれ、ブラッドが部屋に来た。

「シンシア。急にすまない。どうしても顔を見たくなくて」

ちつともすまなそうではない顔でシンシアを熱く見つめている。いつものことながら照れてしまう。その気持ちを誤魔化そうとお説教口調でやんわりと窘めた。

「ブラッド、私たち昨日も会っているわよ？」

「一日でも顔が見えないと、私はシンシア不足になってしまふ」

「もう！」

ブラッドは至って真面目な顔で告げるが、シンシアは恥ずかしくなり耳まで真っ赤になった。

ブラッドは紺碧色の髪と瞳を持っている。王族だけが持つ色だ。

その深く濃い鮮やかな青は、いつだってシンシアを魅了する。スラリとした体軀は細身に見えて日々の鍛錬で鍛えられている。時々ルイスに剣の指南をしてくれることもあるのだ。

ちなみに、ルイスは彼のことをすでに「義兄上」と呼んでいる。

ある日ブラッドを「義兄上」と呼んでしまったのがきっかけだ。

私たちはまだ結婚していないし、幼いとはいえ王太子殿下に対して不敬かと焦ったのだが……ブ

ラッドは感激して喜んでいたので、そのまま「義兄上」と呼んでいる。

「義兄上。あとで僕に剣を教えてくださいな！」

「ああ、いいとも」

ブラッドがルイスの頭を優しく撫でる。

美しい光景に、ほうつと感嘆の溜息が出てしまう。

ルイスは気を利かせたようでシンシアとブラッドを部屋に残して出て行った。

「ルイスは賢いし利発でいい子だなあ。それに私を義兄上と呼んでくれるし」

当然です。我が家の自慢の子ですからね。

「ルイスはブラッドのことが大好きだから」

シンシアがぐすりと笑うと、ブラッドが遅い腕をシンシアの腰に回し自身の体に抱き寄せる。

シンシアはそれに逆らわずに彼の体にそっと身を預けた。

するとこめかみに柔らかな感触がした。

口付けられた！

シンシアは平静を装っているが心臓はドクドクと大きな音を立てている。

ブラッドに聞こえているかもしれない。

「シンシア、愛している」

「わ、わたしも……」

さらにと告げられた愛の言葉に胸が熱くなる。

私たちは婚約者だし、もうすぐ結婚するのだからこれくらいのスキンシップは問題ない。むしろしたほうがいい……と思う、とはいえまだ慣れず緊張してしまう。

シンシアとブラッドはずっと一緒にすごしてきたが、彼が意味ありげな態度でシンシアに触れるようになったのは一年前くらい前から。それまでは真正正銘、口付すら交わしていない（手の甲へのキスは数えないものとする）清らかな仲だった。

シンシアはブラッドを大好きだと思っていたが、性的な意味では意識していなかったことに気付くときとても混乱した。冷静になると結婚する男性にそれではまずいのでは？ と反省した。

シンシアにとってブラッドは自分を守ってくれる世界一安全な男性という認識が強く、手を繋いでもダンスを踊っても安心感と楽しいが勝ってドキドキしていなかった。

（意識した途端にときめいちゃうなんて、無意識でもずっと男性としてブラッドが好きだった証拠だと思う）

もうすぐ二人は夫婦になる。

きつとブラッドは鈍感なシンシアが結婚してから混乱しないように、意識させようとわざと意味ありげな行動を取るようになったに違いない。

もちろん嫌ではない。だってそういう意味で触れられて感じたのは喜びだったのだから。

これからはしっかりと意識しようと決意したが、その必要はなかった。

その日からブラッドを目の前になると勝手に心臓が暴れ出す。

胸がきゅっとなつて、彼に触れてほしいし触れなくなる。シンシアは幸せを噛み締めた。

シンシアとブラッドの出会い。

それはシンシアが産まれた翌日から始まる。

お母様と王妃様は若い頃からの親友だった。その交流はそれぞれの結婚後も続き、お母様がシンシアを出産した翌日、お祝いのために王妃様は四歳になったばかりのブラッドを連れてバルフォア公爵邸にやって来た。

シンシアはもちろん覚えていないが、生まれたてのシンシアはブラッドを見て笑った。そして差し出されたブラッドの指をぎゅっと握ったと聞かされている。

それでブラッドはシンシアに運命を感じて、その場でシンシアにプロポーズをした。

お父様は即座に猛反対した。うんうん、怒っている姿が目には浮かぶわ。

お母様は反対をしなかった。母親の勘で二人が運命だと思ったらしい。

予知能力？ お母様ってどこか達観したところがある。

王妃様は困惑していたそうだ。

ブラッドは勉強を頑張るからとお父様に頼み込み、シンシアに会いに公爵邸に通った。

だからシンシアとブラッドの歴史は長い。

——あれはシンシアが五歳になった頃だった。

お父様が満面の笑みを浮かべてデレデレと、シンシアに新しい絵本をプレゼントしてくれた。

「シンシア、新しい絵本だよ。お父様が読んであげよう！」

「ありがとう！ でもごほんはブラッドによんでもらうの！」

「え……」

お父様は蒼白になって固まったが、シンシアは気付いていない。翌日はブラッドが来る日だったので、それまでは本を開かずに彼に読んでもらうことを楽しみにとっておくことにした。

その夜、お父様が絶望に打ちひしがれ食事でも喉を通らなかつた、大きくなってからお母様から教えてもらった。ごめんなさい、お父様。

お父様は、本屋でどの本ならシンシアが喜ぶかと時間をかけて探してくれて、読み聞かせるのを楽しみにしていたらしい。「さすがにお父様が可哀想になったわ」とお母様は笑っていた。

申し訳ないとは思いますがシンシアにも言い分がある。

お父様に読んでもらうと声が低くて無駄に迫力があり絵本の内容に合わずしっくりこない。まるでおとぎ話が戦記に感じるくらいに違和感があるのだ。はっきり言って怖い。

でもブラッドは声変わり前の高い声で抑揚をつけて面白く読んでくれる。ブラッドだとおとぎ話がさらにキラキラと華やいで感じる。

翌日ブラッドが屋敷に来ると、シンシアは絵本を持って駆け寄った。